

教育のことば

学校発達心理研究所

／研究統括官

発田憲

「背中」

ある日の夕方、落ち葉舞う公園でのできごとです。「もうあなたはうちの子じゃないからッ！」と、激しい口調で言い放ち、何か張りつめたような表情で子供に背中を向ける母親を見かけました。一体何があったのか。5～6歳くらいの小さな子供は「ごめんなさい、ごめんなさい」をくり返しながら どんどん遠くに去っていく母親の背中を追っていました。

近年の親子関係で気になることは、親が感情むき出しで子供とかかわっている光景をよく見かけることです。子供が小さなころは、それでも親子のきずなを断ち切られないように、子供は一生懸命(たとえ自分を見失うほど怒りに満ちた状態の親であっても、または、一切子供を受け入れない冷酷な態度の親であっても)その親を必死に追いつけます。ところが、小学校の高学年にもなれば不快な感情をボロボロと出し続ける親に対して、強く反抗したり、無視したり、逆ギレしたり、勉強をわざと拒否して無言の抗議をしたり、やり場のない思いを強い態度で示すようになります。このころになると、親が背中を向ければ、それを追うことはあまりありません。

親の背中から何も未来が見えないからです。

子供は親の背中を見て人生観を学びます。「自信」と「勇気」と「やさしさ」に満ちた、後ろ姿にあこがれて。苦しい時にはそっと背負ってくれる温もりに守られて。

少しずつ、たくましく歩み出すのです。

昔、ある中学校で実施した親子関係を育む活動の中で、親から子へのメッセージを書いてもらいました。その時の一文を紹介します。

『だまって進めばいいのよ。私は私の人生を歩むから、あなたはあなたの人生を歩みなさい。そして、何かにつまずいたら私の背中を見てごらんさい。あなたにとって参考になる人生の生き方が書いてあるから。』

思春期の疾風怒濤(しっふうどう)の感情にゆれるわが子を自立させるために、そっと距離をとりながら、本当は気にとめている親心がよく表されています。

「親とは何か？」とても難しいテーマです。いつもわが子と正面から向き合っている幼少期のかかわりから、思春期の訪れとともに、わが子には「私の背中から学びなさい」と、時に後ろ姿を見せなければならない。そのせつなさやタイミングの難しさ。無理して背中を見せたものの、思うようにならない子育てに、瞳からこぼれ落ちそうな涙とほこ先のない怒りの感情をぐっとおさえ、おだやかに精一杯ふるまっている何とも微妙な存在かもしれません。それでも「ねえ、お母さん!」「ねえ、お父さん!」「こっちを向いて!」とわが子から声をかけられた時、そっと立ち止まり、堂々と笑顔でふり返ることのできる親でありたいと思います。

公園で見かけた母親の背中は、立派ではなかったと思います。でも、この母親を一方的に責めることはできません。なぜなら、人は子を授けると同時に、すぐに素敵な背中をもつわけではないからです。わが子との歩みの中で、親として少しずつ育っていくのです。さまざまな試練を乗り越えながら、子育てに懸命に向き合い、学び続けた生きざまが、立派な背中に映っていくのだと思います。

「 転んだままでいい 」

「ほら、しっかり！立って！」「まだまだ大丈夫よ！」「がんばって！」などと大声援。運動会での「かけっこ」の1コマです。ちょっと転んだくらいで負けた気になってはいけません。再び立ち上がり、走り切るのがこの競技の醍醐味なのです。

ところが、このような「根性物語」を人生に置き換えてしまうと、対応の仕方はそんなに単純ではありません。たとえば、子供が学級で複数の友達から「ムシ」されたり、「嫌がらせ」を受けたりしていたら、簡単に「大丈夫よ！」とは言えません。

子供が自分自身のことに迷い、完全に自信を失っている時に「ほら、しっかり、立ち上がるのよ！」「がんばらないとダメよ！」などと言ってしまったら、子供はもっと辛くなるでしょう。ほとんどの子供はもう十分がんばって、その結果が現状だからです。

親にも同じことが言えます。子育てが思うようにできなかつたり、仕事で大きな失敗をしてしまったり、自分自身の生きる道を見失なったりするような場面に直面した時、私たちはどのように対処するのでしょうか。

通常は何度も工夫して、その苦境から立ち上がろうと努力を続けると思います。くり返し、くり返し。でも、それでもうまくいかなかったら。そんな時に周囲から「がんばって！」「しっかり！」などと言われたら。この瞬間の胸の苦しさは「ことば」では伝えようがありません。

がんばり方は人それぞれですが、特に責任感の強いタイプは、どうしてもがんばりすぎる傾向があります。そして、自分の力で何とかしようと考えることが多いようです。何度、挫折しても歯を食いしばって立ち上がろうとします。まるでスポーツ中継でよく見る栄光の1シーンのように。

スポーツでは、転んでも転んでも立ち上がる姿は美德です。誰の手も借りず、懸命に立ち上がろうとする姿に周囲は心を打たれます。

しかし、人生ではどうでしょうか。

いろいろやってみた結果が、理想とかけ離れていても、周囲の評価がどうであっても、転んだまま、しばらくじっとしている時があってもいいと思います。人生はスポーツのように短い時間で区切られていません。その時の勝敗が一生を決めてしまうようなこともまずありません。よいこと、悪いことが波や風のように強く弱く、くり返す長い命の営みです。「今回は起き上がるのをやめておこう」と心に決めて、あお向けになって、雲の流れを見つめ・うつ伏せになって、大地の鼓動を聞いて、少しゆっくり考えると、まったく違う「生きざま」を感じることもできません。

そして、もう1つ。自分の困難を人に相談してみることも大切です。「自分の力」には限りがあります。誰かに自分の思いを伝えてみると、絡まった思考がだんだん整理できることがあります。その人の「考え」を聞いてみると、また違った「生き方」を受け入れる機会になるかもしれません。

子供も大きくなると、大人のようにいろいろ考え・悩みます。子供があまりにも苦しそうな時は、「がんばって」と安易に言わず、子供の話をじっくり聞いて、転んだ子供のかたわらでそっと寄り添ってあげることも大切な親のあり方だと思います。

特に、子供に何かある度に、すぐに手をさし出したり、口をはさんだりしてしまうタイプの方は参考に見てみてください。

筆者

発田憲(ホッタケン) プロフィール

カリフォルニア州立大学卒、他、大学・大学院で研究。博士前期課程修了。専門は、発達心理学、実践学校心理学、スクールカウンセリング。英国王立大学等、欧米の大学との共同研究、講義者、私立学校の管理職を経て現職。

子供の発達を専門とする法人研究所の代表、幼稚園・小学校・中学校のスーパーバイズ、文部科学省の研究事業、教育委員会の研修講師、大学講師として活動。全国の学校からの依頼に応じて保護者対象の講演会も多数開催している。